

台湾で運航を再開したエクスペローラードリーム



クルーズ再開に向け動き出した世界

台湾

アジアで最初のクルーズ再開に歓喜

新型コロナウイルスの抑え込みに成功した台湾では、ドリームクルーズによる国内クルーズが再開した。再開までの道のりはどのようなものだったのだろうか。

世界的な拡大が続く新型コロナウイルス

ウィルスの抑え込みにいち早く成功した台湾。中国発着クルーズが最も早くに再開されるだろうといわれていたが、実際には台湾の基隆を発着地としたクルーズが最初だった。運航再開を実現したのは、主にアジアクルーズを手掛けるゲンティンクルーズライン傘下のドリームクルーズ。7月26日、「エクスペローラードリーム」（7万5338トン）で基隆発着の台湾人のみを対象としたクルーズを実施、中型船としては世界初の運航再開となった。

カボタージュ規制により、国内のみをめぐるクルーズを実施できるのは自国籍の船に限るため、バハマ船籍である同船は本来なら台湾国内のみをめぐるクルーズは実

施できない。

しかし、台湾港務公司（TIPIC）によると、今回のクルーズは台湾航港局が、免税店の開店は認めないなど限定的ではあるが、特例として認めたという。

ゲンティンクルーズライン日本オフィスの山本有代表は、「台湾は国内で感染者がきちんとコントロールされていて、経済も回っている。こういう背景とともに、台湾政府とやり取りを重ねるなかで、台湾人を対象としたクルーズなら実施して良いということになった。私たちが台湾発着クルーズを長年実施してきており、台湾政府が柔軟に対応してくれたことに非常に感謝している」と話す。同船はノルウェー・ドイツ船級協会による感染症予防のための認

証「CIPM」を世界で初めて受けた。6月末に同船が台湾に入港した後、台湾政府が指定したホテルに乗組員を2週間隔離し、健康状態に問題がないか確認してから乗船。乗下船時の体温チェックや問診、消毒など感染症予防策も徹底して見直した。

乗組員は乗客との距離の取り方や食事のサーブの仕方のほか、防護服の着方など、万が一陽性患者が出た場合のシミュレーション訓練も入念に実施している。

乗客定員は2000人のところを半数程度に抑えて運航。船内では食事時の混雑緩和のための新しいコンセプトのダイニングシステム「FlexiFeast」（フレキシブルなごちそう）を始めた。乗客は乗船時に無料の食事券を受け取り、指定されたレストランでセットメニューと引き換えるもので、ルームサービスとしても利用できる。

台湾経済にも貢献できるよう、地元の食に焦点を当て、タピオカミルクティーの「シェアティー」やクラフトビールの「タイフーンビール」など人気の台湾ブランドの食を船内で提供している。

「まだまだ動き出したばかりで、フルサービスの提供ができていないが、澎湖島では花火を上げてくれたりと、台湾の地元の方も運

航再開をお祝いして喜んでくれている」と山本代表は力強く語る。今後、同船は基隆発着で澎湖島、馬都島、金門諸島など台湾の離島をめぐる2〜4泊の「台湾アイランドホッピング」を引き続き実施予定だ。

ドリームクルーズと同グループのスタークルーズは5月、シンガポール当局と連携し、「スーパースタージェミニ」（5万764トン）「スーパースターアクリアス」（5万1309トン）を、新型コロナウイルスに感染し回復期にある外国人労働者向け宿泊施設として一時提供した。こうした実践経験が今回の運航再開に生かされているに違いない。

アジアでは今後、中国やシンガポール、日本でも運航再開のめどが立ちつつある。台湾での再開をよい例として、アジアクルーズの復活にも期待したい。



台湾の農業委員会と連携し、地元の特産品などを船内で販売した